

# 山本淳先生を送る

浜 島 昭 二

学生臨時募集に伴いドイツ語の教員を1名採れることになったから、誰か探してこいと富田弘先生（昭和63年没）から言われたのが昭和60年（1985年）の終わり頃のことであった。哲学か社会学を専門とし、ドイツの大学で学位を取り、ドイツ語がちゃんと話せることというのが条件で、知り合いに片っ端から電話をかけて紹介してもらった。しかしそんな条件をすべて満たす人材が転がっているわけではない。紹介されたのはドイツ滞在が1年かせいぜい2年で、ドイツ語運用能力が心配な候補者ばかり。ようやく旧知の名城大学助教授・池田芳一氏（当時、故人）にベルリン自由大学の哲学科で一緒だったという山本先生を紹介してもらった。富田先生からは、良い人を探ったと褒めてもらった。

それにしてもすでに大学や高専のドイツ語教員が減らされつつある時代にポスト増というのは異例のことで、他大学の人からも驚かれたり 羨ましがられたりした。臨増分のポストについてはいろいろ議論があったに違いないが、富田先生が教授会で大演説をされた、と人伝に聞いた。

あれからさらに時代は移り、グローバル化の進展と新興国の台頭による競争の激化が至る所で英語力向上への焦燥感を募らせている状況を考えると、富田先生個人の力量と人間性はあるにしても、本学の教授会でそのような高度に知的で文化論的な議論が可能であったことにあらためて感慨を覚える。

今回、山本先生が定年退職されるとドイツ語教員は私一人になり、富田先生だけがおられた開学当初の状態に戻る。そして1年後に私が辞めると本学のドイツ語教員はゼロになる。その後に大学としてどうするのか、これから、しかも大急ぎで議論し結論を出していかなければならないが、これまで二人で、ドイツ語の授業はもちろんのこと、それ以外でもずいぶんといろいろなことを一緒にできたのは、私としてはたいへん幸福であった。そのいくつかをここに書き記して惜別の言葉としたい。

1987年はベルリン市750年記念の年で、ドイツ本国でもさまざまなイベントがおこなわれ、名古屋でもそれに関連して何かしようという話になった。「記念の年」といって「市制…周年」といわないのは、行政制度のことではなく、古文書に最初に名前が登場した年を起源とするからである。当時、先述の池田氏を中心に県内他大学のドイツ語教員仲間と「名古屋日独文化フォーラム」という組織を作って、さまざまな文化交流活動をしていたこともあり、京都ドイツ文化センター（Goethe Institut）と共催で、ドイツから招待した歴史学者二人と日本人ジャーナリストによるベルリンの歴史に関するシンポジウムを開催した。

パネリストの講演は同時通訳することにし、それを我々二人が担当した。ニュース報道的なものであればその場での同時通訳もできるが、講演なので事前に送ってもらった原稿を訳しておき、ワイヤレス・ヘッドセットを通して講演と同時進行で読み上げるという方法で行うことにした。これは翻訳と読み上げを同じ者がやらないとうまくいかない。この時、原稿がなかなか届かず、最後は郵便では間に合わないからとFaxで送られてきたのが前日で、二人で大学に籠もって突貫作業で訳した。翻訳原稿ができあがったのは夜が白々と明ける頃で、山本さんの官舎で一休みした後、そのまま名古屋市内の会場に飛んでいった。ちなみにこれはまだ我々がパソコンを使い始める前のことで、ワープロ専用機で手間をかけてドイツ語特殊文字を打ち出していた。

この方式の同時通訳は国際シンポジウムなどで一般的におこなわれ、京都ドイツ文化センターで開催された日独国際シンポジウムのために二人で時々京都まで出かけていったが、そのときもこうした作業が必要であった。

日本人パネリストの講演をドイツ語に同時通訳するのが通常、我々の担当であった。第二次世界大戦に関するシンポジウムでは、私が担当した講演原稿の中に、硫黄島を巡る攻防戦の際、日本軍の補給船が米潜水艦の攻撃を受けて沈没した、という記述があった。しかし、その潜水艦が一隻なのか複数なのか、つまり、不定冠詞を付けるのか冠詞のない複数形を使うのかがわからない。山本さんに相談すると、潜水艦というのは艦隊行動はとらないのではないかという。なるほどと即座に納得して不定冠詞を使って訳した。その後日談であるが、シンポジウムの直前、著名な歴史学者であるパネリストにこの点について質問したところ、考えたこともないという返事であった。

こうした協力は我々にとってはそれなりにかなりな負担であると同時に大いに勉強になることでもあったが、当時の京都ドイツ文化センター館長ループレヒト氏からは、「私にとっては豊橋技術科学大学は日本で一番重要な大学です」と言ってもらった。

また、我々二人を含めた仲間5人でナチ・ドイツのユダヤ人迫害に関する本を2

冊翻訳・出版したが、2冊目の翻訳作業を進める中で原本の誤りやデータの不正確なところをいくつか発見した。原稿のとりまとめを山本さんと二人で担当したが、時間的制約もあり最後はまたも数時間にわたる集中作業になった。翻訳仲間とも連絡を取りつつ進めるなかで、著者の Schönberner 氏に直接確認しなければならないこともあり、ベルリン在住の氏には自宅に待機してもらって何度か電話をかけて相談した。最終的には原本よりも正確なものができるかと自負しているが、Schönberner 氏からは我々の翻訳のために書いてもらった序文でお褒めの言葉をいただいた。

我々二人は、富田先生の明確な意図に基づいてこの大学に採用された。私が富田先生とご一緒させていただいたのは9年で、山本さんとは3年弱であったが、我々をよく何時間も雑談をし、議論した。我々二人の議論が白熱することも時折あり、そんなとき富田先生がそこにいる学生たちに、「議論というのはこうやってやるんだ。よく聞いておきなさい」と言われていたのを思い出す。

その富田先生が亡くなられた後、これもすでに鬼籍に入られた当時の佐々木慎一学長を代表とし、愛知県立大学の元同僚の先生方にも加わっていただいて「富田弘先生遺著刊行会」を起ち上げ、2冊出版した。論文集である『板東俘虜収容所』（法政大学出版、1991年）の編集作業はほとんどを山本さんと私で担当したが、原資料にあたる必要が多くあり、二人でジュタリーン文字という戦前まで使われた手書き文字と格闘した。この時の資料はまだ残っているが、私が在職する残り1年の間に処分しなければと思っている。

こうして思い出してみると、ずいぶんといろいろなことを一緒にさせてもらった。哲学と文学、専門分野は異なるが、ドイツ語の教育に関してはずっと相談しながらやってきた。我々の実践は愛知大学の紀要にも取り上げてもらったことがある。良い同僚に巡り会えたことにあらためて感謝するとともに、定年退職という慶事に羨望の思いを抱きながら、惜別の言葉を贈る。